

『竹斎』と当代医学 : 療治譚の構造

著者	松本 健
雑誌名	文学研究論集
号	22
ページ	221(20)-240(1)
発行年	2004-03-31
その他のタイトル	The Relation of Chikusai to the Contemporary Medical Science
URL	http://hdl.handle.net/2241/10246

『竹斎』と当代医学

——療治譚の構造——

松 本 健

一、はじめに

仮名草子『竹斎』の療治譚に関する先行研究の成果を整理してみると、『醒睡笑』などの笑話や狂言に同種の笑いを見つけられるものと指摘すること、もしくはそこから少し変化しているものと指摘することが主だったように思われる。変化の有無はともかくとして、『竹斎』の療治譚を（主人公の職業設定を理由に）、療治に纏わる当代の類型的笑話が採録されただけの場面と見なしてしまうのなら、確かに竹斎のそれぞれの振る舞いに典拠を発見すれば事は足りるのだろう。しかし、主人公以前に先ず作者富士山道治が医師であつたことを意識すれば、そのままでは作者の何らかの思いを見落とすことになるのではないかという危惧も禁じ得ない。

ところで福田安典氏の『『竹斎』——モデル論への試み——』^①は、この療治譚に曲直瀬流医学と関連する独自の笑いが備わることを指摘していた。医学の専門性を考慮したことにおいて画期的だったのであるが、

『竹斎』の後半は個々の療治療の羅列であり、いわば竹斎の名のもとに統一された笑話集の趣がある。（中略）……竹斎伝説の母胎となつたものは、現実のあちらこちらで耳にしそうな曲直瀬流を標榜する庸医達の失敗談であつたのではないだろうか。

という表現からもわかるとおり、竹斎のそれぞれの振る舞いは巷間に散在する失敗例に典拠があったように解釈されている。つまり療治譚を笑話の集合体という性格で認識することにおいては、他の先行論と差異はなかったと見なすことができる。

それに対して稿者は、この療治譚は単発的な存在の失敗談を寄せ集めたものではなく、作者のある思いを映し出すためにその並べ方も含めて緻密に創作・構成されたものという認識を持っている。そこに類型的笑話の利用があったとしても、その扱いは独自の思想を充分に反映するものであったと読み取りたい。その発想の出発点は拙稿『竹斎』の瘡氣療治³で考察を試みた四番目の療治譚である。瘡氣患者に施した竹斎の療治を当代の医書に照らししてみた結果、その滑稽性は作者を含めた当代の医師方の限界点を敢えてさらけ出した自虐的な性格を持っており、無知な人間を見下すような種類のものではなかったことが明らかとなった。つまり療治譚が描こうとしていたのは一人の藪医師の愚かな失敗例などではなく、彼を狂言回しとすることによって浮かび上がってくる当代医学の実態そのものの方だったのではないかという見方を提案したわけである。

そこで本稿では前稿の結論をふまえ、あらためて療治譚の一つ一つを読み直すことによって、そこに包括的に備わる作者の思いというものを発見していく作業に取り組むことになる。

ところで、古活字³本では実際の療治は下巻から始まっているのであるが、そこで起こることを過不足なく把握するためには、あらかじめ一つの概念を用意しておく必要があった。見過ごされがちではあるが、上巻の末尾には「くすしには上手も下手もなかりけりひいきひいきに時のしあはせ」という一首の狂歌が示されている。竹斎を呼ぶことになる一人目の患者が、藪医師とされる竹斎にも期待してみようと思つた根拠として引用したものであり、それは、竹斎のことを聞きつけてかかることを薦めた友人が述べた「藪にも功の者といふ事もあれば、見せさせ給へ」という根拠を、「それはさもし人々たち」と敢えて打ち消すことによって示されていた。医師の評判というものは、治りかけの患者に当たる幸運やその逆の事態、または見かけなどによって左右されるという、庸医の言い訳のようにも聞こえてしまうこの「時のしあはせ」という発想は、本来は患者方の埒外にあったもののはずである。ところがこれが療治譚の始まる下巻に入る前に、医師方ではなく患者方の口からあらわされていたことを考えると、これは寧ろここに登場する医師方の意識を超えて存在していた療治の現場を覆う根拠として、提示されたものであったと認識した方が良いだろう。療治譚を読み進むには、この「時

のしあはせ」の発想を携えておく必要があったのである。

二、療治の手順と無垢なる主人公

一人目の癩（おこりマラリア）を病む患者に対して竹斎が行った診察は次のようなものであった。

竹斎脈を考へて、「熱気はなきか」と問いければ、「熱気少しあり」といふ。「さてこそ申さぬ事か」とて、手ぐすみてぞ飛びしざる。「頭痛はせぬか」と問いければ、「小鬢のあたり痛む」といふ。「さてこそ申さぬ事か」とて、手ぐすみてぞ飛びしざる。「虫はなきか」と問いければ、「つねづね胸虫あり」といふ。「さてこそ申さぬ事か」とて、手ぐすみてぞ立しざる。

患者の口から症状を語らせながら、それがさも自分の診察によって予見されていたものであるかのようなフリをするという藪医師の常套手段、〈問脈〉を取る様子として読むことができる。この場面についての考察にはしばしば、安樂庵策伝による元和九年（一六二三）の笑話集『醒睡笑』巻之三「文字知り顔」における〈問脈〉を取るハナシが参照される。

脈としては浮中沈をも弁せず、七表八裏九道二十四の名をさへ知らぬ程の医者あり。脈をとりて後、病者に問ふ。「胸はいたむ心ありや」「なかなか、あり」。「さうであらう、脈にさう候。さて、足はひゆる事ありや」「いや、あたたかな」。「さうであらう、脈にさうある。頭痛ありや」「いや、なし」。「さうであらう。脈にあうた」と。この作法にてもお医師さまではある。病人となりて、薬を申しうけんはこはものぢやの。

同じような診察の様子を見ることができ、〈問脈〉が笑話のタネとして流通していたことも想像される。しかしここで注意すべきは、『竹斎』ではこの〈問脈〉を『醒睡笑』のように単なる笑話のタネとして消費するのではなく、ある特別な趣向のために利用していたということである。『醒睡笑』には、「足はひゆる事ありや」や「頭痛ありや」のように実際

には言い当てることができている間にも混ぜられており、「いや」と否定されながらも「脈にさうある」と都合よく述べることの欺瞞性がわかりやすくなっている。その滑稽性は、「この作法にてもお医師さまではある。病人となりて、薬を申しうけんはこはものぢやの」といった教訓的説明に集約できるものである。それに対して『竹斎』における〈問脈〉では、「いや」と否定されることはない。この事態を「全てを言い当てている」と解釈すれば、この場面は〈問脈〉の欺瞞性の発露を期待させながらも、結局は〈言い当ててしまった〉意外性を、読者が笑うべき箇所だったとでもいえようか。しかし注意深く読めば、『竹斎』の方にも実際には〈言い当てていない〉問いが混ぜられていたことに気づくことになる。

竹斎が「虫はなきか」と問うたところ、病者が答えたのは「つねづね胸虫あり」ということであつた。竹斎が有無を問うたのはおそらく〈腸内寄生虫〉だったろうが、病者が患つていたのはおそらく〈痢の虫〉だったのである。二人が異なるものを想定していながらもこの会話は成り立っていることになる。病者の答えが〈日頃の怒りつばさ〉程度のものを意味していたとすれば、飛躍の大きさがもたらす滑稽性は、この食い違いにあるだけでなく、〈言い当てたと思われてしまった〉意外性に、竹斎自身が驚くことにも及ぶものであつたといえよう。竹斎は、『醒睡笑』に描かれた医師よりも真つ当な診察をしたというわけではなく、「時のしあはせ」に適つただけのことだつた。実際には「いや」と否定されるはずであつた間にも、病者の拡大解釈によつて肯定されてしまつたわけである。

ところで、この場面で竹斎が見せた「手ぐすみしてぞ飛びしぎる」という振る舞いは、解釈の難しいものであつた。「手ぐすみ」とは弓の弦を強くする薬練くわねを手にとることであり、転じて何かを用意して待ち構える様子があらわされる。そして「飛びしぎる」は後ろへ飛び退く意であり、いわば行為者の前向きの心持ちと後ろ向きの心持ちが同時に示されたことになつていた。行為者の予覚が想像される「手ぐすみ」と、不覚が想像される「飛びしぎる」では表現上馴染みにくい組み合わせとなる。しかしここに先ほど述べた〈竹斎自身の驚き〉という発想を持ち込めば一つの読み方を提案できるのではないだろうか。

『醒睡笑』に描かれた医師は自らを名医に見せるために〈問脈〉を取るといふ作爲的な欺瞞行為をはたしている。それに対して竹斎の行つた診察は、もっと無垢なるものであつた。この病者が癰に罹っていることは周知の事実であり、この期に及んで竹斎が脈を取つて発見する症状や病名は本来ならば無いはずであつた。つまり、竹斎の振る舞いは自らを名

医に見せるための作爲的な欺瞞行為などではなく、名医を真似ただけであつたことになる。脈を取り、薬を処方し、講釈をするのが当代の医師の行いであり、竹斎は精一杯その形を完成させようとしていた。だから厳密に言えば竹斎は、〈脈〉を取り、何気ない質問をしたのであつて、〈問脈〉を取つてはいない。ところが、根拠もなく問うた症状がいろいろ的中しており、予覺と不覺の反応を同時に見せてしまつたわけである。その上、「虫」に関しては、言い当てもいいのに「言い当てたと思わせてしまつた」ことになり、ここには〈不作爲の問脈〉が成立した。それに戸惑つた竹斎は、遂には「手ぐすみてぞ立しざる」ことになるのである。

ここで寛永整版本における改訂についても触れておきたい。そこでの竹斎の反応は、二つ目の問いの答えに対しては、「自慢顔にぞ見えにける」、そして三つ目の問いの答えに対しては、「手ぐすねしてこそ見えにけれ」に変化しており、〈竹斎自身の驚き〉という様子は感じられなくなっている。寛永整版本ではそもそも、三つ目の問いの答えから「胸」の字が削除されており、本当に「虫」がいることになつてしまつてもいたのである。一つ目の問いの答えに対しての反応には、「手ぐすね引て飛びしざる」と本来の所作の名残も見せるが、その言い回しに期待されていたのはおそらく、大袈裟な表現から感じられる滑稽性ぐらいのものであつたろう。整版化による読者層の拡大に応じて、これまで述べてきたような滑稽性は一般的には理解されにくいものと判断され、このように改訂されたと考えられる。寛永整版本ではこの場面は、あり得る解釈として先に述べていたように、〈問脈〉の欺瞞性の発露を期待させながらも、結局は〈言い当ててしまつた〉意外性を読者が笑うべき箇所、として収められたと見てよいのだろう。

しかしながら、寛永整版本におけるこの改訂は我々にこの箇所の本来の意味を読み解く手掛かりを与えたことになる。「胸」の字と「手ぐすみてぞ立しざる」の言い回しが同時に削除されたことは、これらの関係性を示すものと解釈できる。「胸虫」が「虫」になれば、「竹斎自身の驚き」や〈不作爲の問脈〉を決定づけるきっかけもなくなり、「手ぐすみてぞ立しざる」のような複合表現が意味を持たなくなるからである。そのことはやはり古活字本における「胸虫」が、実際の「虫」をあらわしていなかったことを暗示することにもなる。このようなことから、『竹斎』の作者はこの〈問脈〉を笑話のタネとして消費するのではなく、笑いの中に「時のしあはせ」という摂理を提示し、形の完成に精一杯になつてゐる無垢なる主人公を印象づけるために利用していたと見なすことができるのである。

それでは、無垢なる主人公が形ばかり名医の振る舞いを完成させようとしていたところには、どういった意味があつた

のか。この外形そして内容というものに注意しながら一つ一つの療治を見ていきたい。

三、科学の外形と竹斎の〈理〉

療治について考察していくにあたって、説明を簡便にするため初めにいくつかの用語を準備しておきたい。まず療治の正当性の根拠となる道理としての〈理〉、それからその療治に使用される薬としての〈物〉、そしてその〈物〉に備わる性質としての〈性〉、また〈性〉の發揮がもたらす療治における効能としての〈能〉、最後に〈能〉を得るのに適切な〈物〉の使用法としての〈仕様〉である。これらの用語は、『竹斎』の最も早い解説書『竹斎療治之評判』で使われていたものである。この書は『竹斎』から六十年の後、円瓢子によって幕藩体制を支える道学的な観点から書かれたものであり、その内容の偏りを考慮すればそこでの『竹斎』の解釈をそのまま採用することは憚られる。しかしながら道学的に書かれてはいても、用語としての〈性〉は〈性即理〉の〈性〉ではなく、また〈理氣二元論〉の〈氣〉への言及もないことなどから、これらは事態を認識する概念としては朱子学の制約を受けていなかったものと見なすことができ、そのカテゴリーは『竹斎』における思考の枠組みから遠いものでもなかったと思われる。

竹斎の行った最初の療治は、脈を取った例の癰患者に古畳と古紙子の黒焼を薬として飲ませることであった。その理由は嘗て自分がこの病氣になった時、師匠が古きふすまと古き畳を被せたところこの病氣が治ったからだと言っている。先ず、師匠の療治の方から考えてみれば、癰に特有の周期的な悪寒による震えを、断熱材としての古きふすまや古き畳で押さえ込んであるので、これは原因療法ではなく、症状を緩和させて快方に向かうのを待つだけの対症療法というべきものであったことになる。しかし竹斎はその時に治ってしまった。つまりは「時のしあはせ」に適っただけということなのであるが、無垢なる竹斎はそうは考えなかった。そして彼はそれを応用した療治を施すことになる。

ここで注意したいのは、なぜ竹斎は師匠と全く同じ方法を取らなかったのかということである。おそらく竹斎が実践していたのは、科学を作るという作業だったのであろう。科学とは「普遍的真理や法則の発見を目的とし、一定の方法にもとづいて得られた体系的知識」（『日本国語大辞典』）を指す。ここではこの「目的」こそが重要となる。宗教的療治ならばその背後には予め体系化された法があり、療治はその発現として施されてきた。また特に戦国期に興隆したであろう秘

伝を本分とする諸医家の療治ならば、秘薬・秘方から効験への一方向的な視線のみがその評価のために必要であった。つまりそれらにおいてはその本拠が問い直されるということとはなかったわけである。しかし、あらわれた（もしくはあらわれなかった）効験を因果律の一要素としての〈能〉と認識することができれば、そのあらわれに応じて〈仕様〉・〈性〉・〈物〉・〈理〉への逆方向の視線を持つてその合理性を探ることが出来る。模索と実証を通して方法は一般化され、知は体系化される。そのことに価値を見出し、それを「目的」とした人々があらわれたとき科学は始まった。

近世の初期、実証的医学研究を標榜した曲直瀬流医家たちは、前近世までの療治を克服し、対処的な経験を一般化するため、前例から帰納法的に療治の〈理〉を導き出し、その〈理〉に基づいた科学的療治（科学を構成する療治）を確立することに努めていた。それをふまえて竹斎は、名医としての振る舞いを完成させるべく師匠の療治から〈理〉を導き出すとしたのである。もしここで〈理〉を見つけ出せるとすれば、それはもちろん〈被せる〉という〈仕様〉にこそ存在していたはずであった。ところが竹斎はそれに気づかず、〈理〉を〈物〉の方に求めてしまった。〈古きふすまと古き豊〉という〈物〉が〈瘧を治す〉という〈性〉を持つており、ここにこそ〈理〉が存在していると誤解して、〈古畳と古紙子〉を〈飲ませる〉といったような〈仕様〉を無視した処方をしてしまったわけである。

このように〈理〉の置き所を勘違いする竹斎のありさまが、療治譚の滑稽性の基本的な仕組みとなる。彼は決して荒唐無稽な振る舞いをしていたのではなく、「科学的」な態度で臨んでいたことになる。前例から療治の〈理〉を導き出し、その〈理〉に基づいて療治を施す。この発想は見事に当代の科学の形をしていたわけである。ところが〈理〉の解釈にズレがあったためにそれはやはり科学ではなかった。当代の科学によく似た疑似科学と認識できるからこそ、有識の読者達がこれを笑うことができたのではないだろうか。

ところで、この療治もまた「まことに時のしあはせにや、おこりは其ままおちにけり」との結果を得る。不思議に思った患者方は薬種やくしゅを聞き、さらにはその〈理〉を聞くと、どつと笑うことになる。重要なのは、薬種にした〈古畳と古紙子の黒焼〉という〈物〉を聞いた段階では「めづらし」とは思っても笑いはしなかったことである。この患者方が注目しているのは明らかに〈理〉であり、〈物〉ではない。〈物〉が如何に見慣れぬものであったとしてもその選択の根拠となる〈理〉が真つ当ならば笑いはしなかった。つまり〈理〉が当代の科学として納得し得るものであるのかどうか彼等の判断基準だったことになる。「時のしあはせ」という摂理を述べる役割があつた彼等は、数医師という評判を知りながらも

敢えて竹斎を呼んだ見識ある患者方であった。彼等の見識のありようは読者に、外形と内容という二元的な視線を持つことを促している。

二番目の療治は眼に銹屑（鉄の削り屑）の入った患者に対して行われた。竹斎は磁石を続飯に押し混せて紙に塗り、眼に貼り付けることによって三日でその銹屑を取り除いた。磁石の持つ、〈鉄を吸う〉という〈性〉を利用して、〈眼から銹屑を吸い出す〉という〈能〉を求めたわけであり、一見すればとても真つ当な療治に思える。しかしこの場面で描かれていたのは本当にそのように見るべきものであったのであろうか。

天正六年の『金瘡秘伝』（浅見道斎）に、〈矢の根を抜く〉療治として同じような磁石の利用法が書かれていたことは先学の指摘するところであり、竹斎の療治は故ある方法であったように語られることが多い。しかし注意しなければならぬのは、竹斎がその後に講釈したのはそのようなものではなかったということである。唐と日本の境に磁石山があり、その磁力は剣を差して歩いていた人を吸い寄せるほどのもので、この磁石はそこで取れたものだという。だから小さな銹屑を取り除くことなどは簡単だという講釈なのであるが、それにはどのような意味があったのだろうか。

患者の眼から銹屑を取り除き賞賛された竹斎は、「大成論 脈経、能毒……」などと医書名を列挙して自らの勉強ぶりを自慢する。彼に敢えてこのような行いをさせながらも、そこでは『金瘡秘伝』のような書名や金瘡療治の事例に触れてはいない。このことから導かれるのは、金瘡療治におけるこのような方法は、本当に〈秘伝〉であって、『竹斎』の作者を含めてほとんど知られていないものであったということ、もしくは、作者はこのような方法を知っていたとしても、竹斎はそれを知らなかったという設定にしたということであろう。いずれにしてもこの場面については、竹斎の心中はともかく、実際には正統なる療治を正統なる〈理〉に基づいて施したというわけではなかったのではないか、という発想を持たなければならぬ。

竹斎が名前を挙げた医書の中で、磁石の使用を見ることができているのは、『諸本草』というもののぐらいいである。この時代に日本で正典として『諸本草』と言った場合、該当するのは宋代の『証類本草』や明代の『本草綱目』、そして日本の『宜禁本草』といったところになる。『証類本草』や『本草綱目』には磁石の外科的利用法を見ることができているのだが、それは〈誤って針や鉄を飲みこんだ〉場合の療治として、『日華諸家本草』の引用、〈磁石を削って細末にし、筋肉に傷がつかぬように飲み下す〉こと、そして『錢相公篋中方』の引用、〈磁石に孔を穿って糸を通し、飲んで引く〉こと、といった

方法が記されているのみであった。それでも、もし竹斎がこれらの前例から〈理〉を導いて、それを応用した療治を施したというのであれば、それは賞賛に値する行為であったと見なすこともできる。ところが、実際のところ竹斎が述べた〈理〉は伝説上の磁石山であった。本草書には、遠隔から〈吸い寄せる〉ほどの療治はなかったことを考えれば、当代においてはやはり竹斎の方法は突飛な発想に基づくものであったといえる。

術として伝えられていた療治の中に〈理〉を発見し、それを一般化させた科学を作り上げることが医学者には期待されていた。ところが医書の存在を強調した割には、竹斎が〈理〉を求めたのは先人の療治例などではなく、磁石山の方であった。ここでもやはり〈理〉の置き所のズレが滑稽性を生んでいたであろう。眼から銑屑を吸い出すというイメージは、磁石山が剣を差して歩いていた人を吸い寄せたという逸話からの強引なアナロジーでしかなかったのに、竹斎は結果を得ることができてしまっている。その上、三日経ってからの効験だったために療治との因果関係は定かではない。彼の療治が仮に現在の視点から見ても真つ当なものであったり、何らかの秘伝書に記載があるものであったとしても、彼自身に起こったのは「時のしあはせ」に支配された偶然による成功だったのである。

四、当代医学への懷疑

三人目は、落馬の患者であった。竹斎の施した療治は、五・六度の落馬で痛がつている患者を無理に寝かせようとするだけであり、その〈理〉は医書に見立てられた謡本『頼政』にもとめられた。「宮は六度まで御落馬にてわづらはせ給ひける。それは前の夜に御寝ならざるゆへ」との詞章を読み聞かせ、高倉院の史実を講釈し、「医書にはづる療治をば此竹斎はせぬ」と言う。ただ寝かせようとするこの〈理〉はこのように示されたのであるが、滑稽なのは、それが落馬による怪我の手当の〈理〉ではなく、落馬の予防の〈理〉であったことであろう。むしろ対症療法を望んでいた患者に対して、あまりにも原因に遡った療法を取ってしまったことになる。当の患者にとつては到底納得できるものではなく、「痛さは痛し寝入られず」となっているのに、周囲の人々は「あれ程物知りの竹斎なれば、療治におろかはあらじ」と言う。

物知りへの感嘆が、行われてもいない手当の方法に対する納得にすり替わってしまったかのような結末にも滑稽さがある。医学者に求められていたのは対症経験から科学を構築していく作業であったのだが、竹斎は落馬患者の療治の前例を知

らなかつたのだろう。そこで謡曲から引くことになったのだが、そこには落馬の予防の〈理〉しか書かれていなかった。たとえ求めるべき〈能〉が違っていたとしても手順の完成だけにはこだわったわけである。

この場面で最も重視しなければならないのは、竹斎の「医書にはづるる療治をば此竹斎はせぬ」という言葉である。もちろん謡本は医書ではなく、彼はこれまでも、そしてこれから医書に則った療治などしてはいない。それではこの言葉にはどういう意味があつたのか。これは、嘘をついているということではなく、無垢にして少しズレている彼が常に正統なる療治を施している気になっていたということなのであろう。その気になっているだけでありながら、竹斎は結果を得ることができてしまっている。敢えて内容を置き去りにした外形だけが印象づけられたことによって気づかされるのは、ここでは成功を導いた薙医師への感嘆の眼差しなどよりも、当代の医療の現場で起こっていることを賄い切れていない、医書に代表される当代医学への疑問の眼差しを持つことこそが求められていたということではないだろうか。

この発想を支えるものとして想起できるのは、学派の内にある医家たちが寄せていた医書に対する多大なる期待である。そもそも医書は彼等の学問を象徴する存在であつた。川瀬一馬氏『古活字版之研究』に詳しい考証があるが、日本における印刷出版の歴史は仏書と医書によって拓かれた。仏書が寺院における印刷という作業そのものを強い基盤として開版されていったのに対して、医書の方は作成者と読者の在り方にその理由があつた。まず、医書はその専門性の高さゆえに読者が限られていた。増刷のできない古活字版印刷においては、読者数の予測がつくことは大きな利点となつたのである。さらに注目しなければならないのは、印刷技術の到来した近世の初期という時代が、医学の世界における大きな変革期に重なるという事実である。田代三喜によつてもたらされた金・元の李朱（李杲・朱丹溪）医学の教育を受けた曲直瀬道三とその養子曲直瀬玄朔は、中世までの仏教医学を一掃すべく実証的医学研究を天下に唱えた。中国の先進医学は医書によつて摂取され、その要素が彼等によつて順次書き起こされていったのである。しかしながら実証とはいっても日本で直ちに同様の臨床経験が得られるものばかりではない。つまりそこでの例証と分析そして網羅性のアピールこそが医書の存在意義であり、その作成と享受自体が医学の重要な実感となつていったといえる。

教育に重きを置いていた曲直瀬流医学は、古活字版の技術に相乗しながら急速に体系化されていった。堅固に構築された学門において、医書への依存と期待が恒常化すれば、その末端には本来の実証的研究態度から乖離してしまう事態もあり得たのではないだろうか。医というものを宗教ではなく科学の土台に載せたのならば、それは絶えず研究によつて上書

きされていくものでなければならなかった。つまりそこには、彼等の医学が未だ知らざる領域を常に残しているという現実を自覚する必要があったはずのだが、医書というものがとく完成された術の体系として目に映りやすかったことは想像に難くない。

この時代において、医書に代表される当代医学への無批判な信奉というものがもしあったとするならば、『竹斎』におけるここまでの療治には、それへの疑問の眼差しが確かにあったといえるだろう。そしてそれは次の療治においてさらにはっきりとした形となってあらわれるのである。

四番目の療治は、瘡氣（梅毒）患者に対して行われた。竹斎は何らかの薬とともに好物（食べると良い物）のリストを書いて与える。ところが、鼻は腐り落ち、脛は折れるといったように病状は進行するばかりで、患者方から非難を受けることになってしまう。病者に対して好物を示すことは、当代における名医の療治として大切な手順の一つであったのだが、ここにおいてのこの行為には特別な意味があった。近世における医と食の発想は本草書に拠っていた。ところが『竹斎』の成立時、難病であった瘡氣には、実のところ好物とするに相応しい食物素材は本草書の中で確定されてはいなかったのである。そうでありながらも竹斎は、もっともらしい振る舞いで好物を盛大に並べ立て、眉唾物のリストを完成させている。滑稽さ以外にここから読み取るべきことがあるとすればそれはどのようなものであったのだろうか。

『竹斎』の成立時、瘡氣は日本においては未だ流行りはじめたばかりの病氣であったので、その療治は軽視し得ない題材であったと思われる。療治手順の外形の完成が印象づけられたことによつて際立っているのは、内容の欠落ということであろう。当時の研究レベルから、ここでの好物を書くという行為は、その内容を伴い得ないものだった。そのとき組上に載せられていたのはもちろん一人の薙医師ではなく、医書に代表される当代医学の空隙だったはずである。瘡氣の好物を示すことができなかったのは『竹斎』の作者もまた同じだったからである。つまり、作者が敢えてそのようなものを取りあげていたところを意識すれば、『竹斎』の療治譚というものには、当代医学の進展状況そのものを題材として扱った姿勢があったということに気づくことができる。またそこからは、当代医学が未だ発展途上であることを痛感せずにはいられないもどかしさといったものも読み取ることができるのである。

そして、先に述べたような、医書に代表される当代医学への無批判な信奉というものは、その後の竹斎の振る舞いによつてさらにわかりやすい形で示される。患者方から非難された竹斎は謠本『西行校』を医書に見立て、「花落ち枝たれてく

ぬるといへども甲斐なし」と読み上げ、病状の進行は仕方のないことであつて自分には非がないとうそぶく。外形ばかりは完成させるが結果には責任を持たず、医書にあるから納得しろというような理屈はまさしくそれをあらわしている。

ところで、作者は竹斎にこのようなことをさせてはいるが、それは彼を非難の対象とするための造形ではない。彼には当代の現実を映し出すための契機となる役割があつた。これまでにも、〈藪医師ではなく当代医学を〉という言い方をしてきたが、描かれるべきは彼の周囲にあつたといえる。しかしながら〈当代医学〉などというものは人間から離れて存在しているわけではない。それを支える医師方と患者方のありようこそが重要だつたのである。彼等への視線はこの後の療治でさらにはつきりと示されていくことになる。

五、当代医学を担う医師方と患者方

五人目の熱氣を病む患者は有徳（金持ち）の人であつたので、歴々の医師が集まつて薬の配合を相談していた。そこに加わつていた竹斎は、「茄子の香の物を一片くわへ申たき」と提案して笑われる。彼の〈理診〉は、「飯の湯の熱き時に、茄子づけを湯の中へ入候へば、熱き湯も其まま冷むる」ということであつたのだが、それを言うときさらに笑われてしまう。この場面の考察においてしばしば参照されるのは『醒睡笑』巻之二「腔」における一つのハナシである。

下湯に入りたる者いふ。「この湯あつくてたまられず。香の物をはやくもち来れ」。「なんの用に」と問へば、「飯の湯のあつき時、香の物にてまはせば、ぬるうなる程に」。

香の物で飯の湯以外のものを冷まそうとする滑稽性は共通しているのだが、注意したいのは、前に述べた〈閭脈〉の例と同じように、『竹斎』の方は笑話としての完結とは別のところに意図を持っていたということである。その理解のために先ず意識しなければならないのは、『醒睡笑』の方では「茄子の香の物」ではなく単に「香の物」となっていたことである。飯の湯を冷ます〈能〉は、茄子に限らず香の物全般に期待できるものであつた。七十年ほど下つて成立した日本における本草書の集大成『本朝食鑑』の「香の物」の項を見てみると、

大抵食後飲湯時必用者有三宜 一曰飯湯太熱以水醒之則無味以香物攪醒則味美適口為宜……⁽⁹⁾

と書かれており、ここでは、瓜・茄・細羅蔔^{さいこん}・蕪根・牛蒡・大角豆^{ささげ}・刀豆^{なたまめ}・竹筍^{はすのね}・蓮藕^{れんぐ}・昆布・荒布^{あらめ}・生姜・藟荷子^{れいこう}など、様々な野菜が想定されていた。つまりこのような事例から得られている「理」があるとなれば、それは「攪き醒ます」というような「仕様」によって「香の物」が「冷ます」という「能」をもたらしということではあっても、「茄子」に「冷ます」という「性」が備わっているということではなかったはずであった。

ところが注意しなければならないのは、このような事例とはまた別に、「茄子」には「熱を冷ます」という「性」が備わっていることが当代において認識され得ていたということである。「宜禁本草」の茄子の項にも「久冷人不可多食」「熱者少食之良」などがあり、もし竹斎がそれに言及すれば、当代の科学に合う「理」を示すことになり、他の医師たちの賛同を得られたとも想像できる。茄子には「熱を冷ます」という「性」があり、それは人体に即有効なものと考えられていたのに、敢えて飯の湯を経由してしまうところには、やはり「理」の置き所を勘違いした滑稽さがあつた。「熱」をめぐつて二通りの「理」を有する「茄子の香の物」を登場させたことが作者の工夫であり、経口薬を選ぶこの状況において竹斎が正解の方の「理」を外してしまったことによって、「理」の置き所への注目が促されていたといえる。

ところで、「茄子」に「熱を冷ます」という「性」が備わっていることが認知されていたのであれば、竹斎の「物」の選定自体には誤りはなかったことになる。そのことをわかりやすくしたのは、寛永整版本における改訂であつた。そこでは笑われるタイミシングが少し変化している。竹斎が笑われるのは「飯の湯」の例を「理」として持ち出してからのことであり、「茄子の香の物」を加えることを提案した段階では、「さて／＼珍しき加減かな。子細は如何に」と問われるだけであつた。つまりこのように先が促されたところからは、「理」が当代の科学に合致するものでありさえすれば、この療治は納得され得るものであつたことが暗示されている。ところが竹斎の述べた事例は、「攪き醒ます」というような「仕様」に関する「理」をあらわすことはできても、茄子の「性」を示し得るものではなかつたので、笑いが起こつたわけである。古活字本と寛永整版本との差からはさらに重要なことが読み取れる。ここでの変更はおそらく、寛永整版本の時代には本草書の度重なる出版により、茄子に熱を下げる「能」が期待できることが既に広く認知され、歴々の医師たちにそれを

否定するような振る舞いをさせることは不自然と見なされた結果なのだろう。つまり言い換えれば、「茄子の香の物」と聞いただけで笑った古活字本に描かれた歴々の医師たちは、茄子の〈性〉に対する認識を確定されてはいなかったことになる。「茄子の香の物を一片くわへ申たき」と提案して笑われた竹斎は、「皆々面々たちは、物を知りて笑ひ給ふか、又物を知らで笑ひ給ふか」と言った後、彼なりの〈理〉を説明する。もちろん、知識のことを敢えて口に出した竹斎自身の知識の焦点がズレていたことに滑稽性が見つけられるのだが、もしここで彼が真つ当な〈理〉を述べていたらどうなのだろう。つまり気づくべきことは、ここでの歴々の医師たちは構造的には、講釈によって新たな知識を授けられるはずの立場に据えられていたということである。彼等は伝統的配剤には異質であった茄子を一笑に付してしまった。滑稽性の中で見えにくくなっているが、この場面では医学を術のように捉えている彼等の旧守性にも確かに視線が向けられていたのである。

竹斎が示す独特な療治や〈理〉は、それまで正統と思われていた療治や〈理〉の実体を対角線上に映し出していた。〈能〉は「時のしあはせ」によっても得られるものであり、医学は発展途上のため実際の現場を賄い切れてはいなかった。そこで重視されていたのはやはり、内容ではなく外形だったわけである。これは一人の薙医師のことではなく、他の医師方や患者方の実情の話である。それは次の場面ではつきりとあらわされる。

六番目の療治では、「さる人のわづらひ」に対して竹斎が薬を与える。すると少し効果があらわれてくるのだが、なんと患者方は、「あの竹斎づれにかかりつつ、後のわづらひいかせん。よき医師にかかれ」と言つて法印法眼を呼び集めてしまった。竹斎は自らのみずぼらしさを恥じて逃げ出すことになり、大慌てでおかしな身支度をしたり蹴つまずいたりする様子が笑いを誘う。しかしここには竹斎の視点から、綾や錦や金欄で身を飾ることのできる他の医師方、そしてそこに信頼を寄せる患者方の存在が描かれていた。無念に思つた竹斎は、「あしなくていかにのぼらん座敷まで医師の道は達者なれども」と捨て台詞のごとく狂歌を詠む。内容（医師の道）ではなく外形（あし＝駕籠・金銭）が重視される医師方や患者方の実情を嘆いているわけである。

ところで寛永整版本においては、大慌てで逃げ出すこのハナシは六番目の療治としてではなく、五番目の熱気を病む患者の場面の後半部を構成するように改訂されている。そしてこの狂歌は、竹斎自身ではなく他の誰かが詠んだことになっているので、そこでは竹斎の無念さ、医師方や患者方の実体というものがより客観的な視点から伝わってくる。「医師の

道は達者なれども」という表現によつて、寛永整版本においては、熱氣を病む患者に「茄子の香の物」を処方する竹斎の療治は、完全に肯定されていたことになる。それでも逃げ出さなければならなかったところからは、彼を取り巻く環境の厳しさを訴えかけていたことがわかるのである。

六、過剰表現による意味の剥奪

最後に七番目と八番目の療治、そして寛永整版本において増補されたもう一人の患者の療治を同時に見ていきたい。

七番目の療治は、梅を喉に詰めた患者に対して行われた。竹斎は磁石を口の端へ押し当ててみるが、それでは吸い出せないとわかると今度は吸膏藥すこうやくを口に貼り付ける。すると梅は取り出すことができたのだが、目と鼻を一所へ吸い寄せ、目の玉も二三寸吸い上げてしまった。「梅の療治は心得たり。目鼻の事は知らぬ」と言う竹斎の無責任さに患者方は怒り出し、竹斎は逃げ帰ることになる。そして八番目の療治は、井戸に落ちた子供を助け出すことであつた。竹斎は吸膏藥を戸板に貼り付け井戸の蓋にし、吸い上がってくるのを待っている内に子供を死なせてしまう。周囲の人々からひどく責められると懷から医書を取り出し、「なに／＼、医書の事。井のもとへ落ちたるおさなき人をば、吸膏藥にて吸上ぐべし。是見給へや人々」と〈理〉を主張するが、それでも散々に打擲を受けてしまう。

その後、寛永整版本には、腹中を患う妊婦の療治が増補されている。妊婦は膿血を下しているので、竹斎はそれを吸い上げるために吸膏藥を丸めて飲ませる。その〈理〉は、「いで／＼此わづらひの起りを語りて聞かせ申べし。腹中なる子が唐瘡を煩ふ故に、その瘡の汁が下るなれば、さて膏藥を飲ませたる」と示された。原因療法のように「起り」について語りながらも、結局は対症療法であつたところにも滑稽さがあるのだが、結果としてそれによつて胸先へ吸い上げられたのは、腹中の子の方であつた。取上婆が「生れ月の事なればいかゞはせん」と聞けば、竹斎は「さあらば只今生せて見せ申べき」と言つて、磁石を粉にして臍に付ける。すると腹中の子は、取上婆の肩を越えて、向こう三間ばかりへ飛び出した。そして「竹斎手柄をしたりとて、どつと笑ひにけり」と療治譚は終わっている。

七番目の療治において、磁石の〈吸う〉という〈性〉が、梅を〈吸い上げる〉という〈能〉を発揮しなかつたことは納得しやすい。磁石が金属だけを吸い寄せることは『本草綱目』にも書かれており、梅との関係に〈理〉がないことは当時

においても明白であつたと思われるからである。そこで問題となるのは、吸膏薬の〈吸う〉という〈性〉に、梅を〈吸い上げる〉という〈能〉は期待できたのであろうか。梅が出たことは「時のしあはせ」と見なすこともできるが、目鼻を吸い寄せたことはどのように考えるべきであろう。

ここまでの療治譚が、当代医学の不完全さと、それを盲信することの愚かさを浮き彫りにするものであつたことは既に述べてきたが、さらにここで新しい要素が加わつたと見ることができる。それはハナシが連なるにつれて生まれ出る過剰表現の滑稽性であつた。

何かの療治に適つた〈物〉が、他の療治にも適うとは限らない。医学の進展によつて当然意識しなければならなくなるのは、場合によつて求める〈能〉は細かく違つており、それによつて必要とされる〈性〉も違つてくるという現実であつたはずである。しかし、実際に世間で行われていたのは、古い医書などの〈理〉をもつて、既に薬として認知されている〈物〉をあたかも慣例のように使うことであつたのかもしれない。薬とは認められにくかつた茄子を、熱気患者の処方に提案して笑われたところからもそれはわかる。求めるべき〈能〉がズレていながらも、薬として馴染みのあつた吸膏薬を繰り返し使うことは、まさしく外形にこだわる当代医学の、科学になり切れていない一面を露呈させるものであつた。しかしながら、それを信奉することの愚かさは、ここに及んでは全く逆の形で指摘されていたのである。〈能〉があらわれないというのではなく、梅も目鼻も吸い上げるといったように、〈能〉を過剰なる形で發揮させたことによつて、そもそも空洞的であつた〈理〉の実体が晒されたことになつたのである。つまりここまで来れば、療治が生み出した〈能〉はもはや語りの技術の内のみにあるもので、現実の状況においては意味のないものとなつていたといえる。目鼻にとらわれていては、ハナシの本線が見えにくくなつてしまう。そのとき見落としてはならなかつたのは、結果に反応するばかりの無力で素直な患者方の姿であつた。

このような発想は八番目の療治にも続いている。前の療治において吸膏薬に〈能〉が見られたからといって、今回井戸に落ちた子供を吸い上げることはできなかつた。その様子は、「吸上るか」と待ければ、何かはもつて上るべき。とかく時刻うつる間に、おさなき者は果てにけり」と描かれている。「何かはもつて上るべき」という言葉から、このような方法で〈能〉が得られないことは、疑う余地の無いものであつたことがわかる。それでもこの子供の両親を含めて周囲の人々は、「とかく時刻うつる間」ずっと待つていたわけである。医師方の行為を盲信するしかない患者方の無力で素直なあり

さまがやはり描かれていることになる。それが当代医学の不完全さを構成する一端であったといえよう。

そしてここにも過剰表現が加わる。竹斎は、懷から医書を取り出し、「井のもとへ落ちたるおさなき人をば、吸膏薬にて吸上ぐべし」と読み上げている。不可思議ではあっても竹斎はこれまで一度も嘘をつくことはなかったたので、やはりこの場合もそのように書かれた医書（のようなもの）があったと仮定してみたらどうであろう。二番目の療治の場面で医書の名前をたくさん並べ、三番目と四番目の療治の場面で謡本を医書に見立てた流れから、実態を離れて医書のみを〈理〉とすることの愚かさを、別方向から指摘する段階であったのかもしれない。これも目鼻を吸い寄せたことと同じように過剰表現によって、盲信される傾向にあった当代医学の根拠としての医書や、慣例的に処方される薬の威光を骨抜きにする場面だったわけである。發揮されるはずのない〈能〉を發揮させてしまうことや、書いてあるはずのない療治法を書いてあるとしてしまう過剰表現は、語られた言葉からその意味を失わせている。現実では起こり得ない事態を表現することによって、そもそも取るべき方法が間違っていたことを印象づけるのである。

寛永整版本に増補された腹中を患う妊婦の療治もまた、その流れの中にある。吸膏薬によって腹中の子が吸い上げられたことや、磁石によって飛び出してきたことは、まさしく過剰表現であり、それによって、他の療治では一度は〈能〉を得られた〈物〉たちへの盲目的な信奉を牽制している。寛永整版本にこの療治が増補された理由については、田中宏氏の『整版本『竹斎』の研究（その三）⁽¹⁰⁾』のように、「古活字本では、井戸に落ちた子を死なせると言う無惨な話で終わっているの、その後味を少しでもやわらげる」という意図があったとする見解が一般的であったのかもしれないが、狙いはそれほどばかりではなかったといえよう。吸膏薬と磁石を再び登場させたことによって、状況が異なりながらも「一つ覚え」のように同じ〈物〉を繰り返し使用しているありさまは意識されやすくなり、さらには、前の二つの療治ではわかりにくかったかもしれない過剰表現の部分をどのように読むべきかが示されていたことになるからである。

七、おわりに

これまで見てきたように、竹斎は自らの療治が如何なる結果を招こうとも一切反省などはしてこなかった。それはこのハナシの目的が、彼の心情を描くことではなく、完成されているようにで完成されていなかった近世医学の実体というもの

を、彼を狂言回しとして映し出すことだったからである。無垢にして少しズレている竹斎が、名医らしい振る舞いを形作ることにこだわって行動すれば、彼の周囲には自然にそれはアレゴリーとなってあらわれていたのである。

療治の成功という結果は明らかな〈理〉の誤解を前提として、そして失敗という結果は「正統的」手順を過剰に演出することによって導かれていた。そのような逆転の事態を可能にしていたのが「時のしあはせ」であった。「時のしあはせ」は、当代の療治の現場を覆う摂理として提示されたものであったが、もちろん「竹斎」の療治譚は、その存在自体を表明することなど目的とはしていない。「時のしあはせ」によっても〈能〉が得られるということは、「正統的」な方の療治において〈理〉の認識に誤解があった可能性を示唆している。そして「正統的」手順が失敗という結果に結びつくのは、それまでの成功例が手順そのものではないところ、つまりは認識されていなかったところの〈理〉によってたまたま導かれていたものであったという可能性を示唆している。竹斎の尋常ならざる療治が、当代の現場を賄いきれない医師の現状を照らすために用意されたものであったように、「時のしあはせ」は、不安定なる〈理〉の認識のために未だ中世的医療から脱却しきれていなかった当代医学の現状を、照らすために用意された一つの抗力であった。新時代に相応しい外形を纏いながら旧時代の内容を引きずり齟齬をきたす。現実社会におけるそのような実感を、趣向を凝らした方法で表象していたのである。

そしてその方法として最も高踏的なものが、過剰表現による意味の剥奪であった。実はこの方法は療治譚の始まる前に既に暗示的にあらわされていた。竹斎は「天下一菽医師竹斎」という看板を掲げ、「扁鵲ヘンシヤクや耆婆シバにもまさる竹斎を知らぬ人こそあはれなりけり」との狂歌を書き添えていた。そもそも「天下一」の号は、天下唯一の名工・名品の意として、戦国期より為政者によって吟味された職人や製品に与えられてきた名譽の称号であったが、やがて諸品の看板に乱用されるようになり、天和二年（一六八二）には使用が禁止されるに至ったものである。「竹斎」の時代、巷間に過剰な誇大広告が増え始めていたことが想像される。しかし、ここで「天下一」の後に続いた肩書きは、こともあろうに「菽医師」という負の響きを持つものだった。「菽医師」と呼ばれているうちに、思わず「菽医師」と名乗ってしまった単純無垢なる竹斎の人物造形を笑うことができるのだが、もう一つの効果は、「天下一」の号が如何なるものにも付けられてしまうことを示すことによって、この言葉の意味内容を骨抜きにしていたことであった。そしてその勢いのまま、「扁鵲や耆婆」といった名医の名も非常に軽いものにしてしまっている。

言葉とそれが示し得る意味範囲への注目は、『竹齋』の特徴でもあった。井戸に落ちた子を助け上げろべき事態では、腫毒の膿を出す際の「吸上ぐ」という概念語を当てはめようとし、熱気患者の体温を下げるべき事態では、飯の湯における「冷むる」という概念語を当てはめようとしていた。他の療治においても見られたことだが、〈理字〉を誤解する竹齋によつて引き出されていたのは、二つの異なる事態と、そこに通用することのできない一つの概念語との関係であった。異なる事態でありながら、竹齋にはそれを分別するだけの言葉を用意することができてはいない。このことによつて描かれていたのは、知の枠組みの構築過程における、言葉（外形）と意味（内容）の不均衡なる状況であった。

一方、脈を取る場面においては、〈腸内寄生虫〉と〈癩の虫〉という二つの病状は、偶然にも「虫」という一語に集約されてしまう。「時のしあはせ」がはたらけば、言葉（外形）は、意味（内容）の統一を待たずして、共有されることになる。これもまたそれらの不均衡なる状況をあらわしていたわけであり、「時のしあはせ」が果たしていた補完の論理という役割を確認できよう。

ここまで述べてきたようなことが、療治譚に包括的に備わる作者の思いといえるものだったのだが、これは療治譚に限られたものではなかった。旅の見聞を綴る他の場面にも常に時代の移り変わりというものと、それに見合わないものの存在が描写されていた。そこにも文字通りの解釈は憚られる箇所があり、やはり言葉の意味を剥奪していく方法、つまり外形と内容を乖離させていく方法が用いられていたと読むことができるのである。

作者が敢えて言葉と意味の混乱を前景化させたのには、それを自らのハナシの技巧として取り入れる目論見もあったのだろう。ある一つの言葉（外形）が、常に一つの意味（内容）を指し示すわけではないという了解が得られれば、作者は幅広い表現方法を獲得することになる。当代の社会を活写するためには必要な手続きであつたのかもしれない。『竹齋』の最後の場面に示される徳川の治世や新しき都である江戸を寿ぐ言辞に、如何なる意図があつたのかもここから推察されていくべきことだったと考えられるのである。

注

- (1) 集約的なものとしては前芝憲一「『竹齋』の笑い」(『仮名草子——混沌の視角——』・平成七年・和泉書院)が挙げられる。
- (2) 福田安典「『竹齋』——モデル論への試み——」(『語文』第五十七輯・平成三年・大阪大学国語国文学会)

- (3) 拙稿『竹齋』の瘡気療治」(『日本語と日本文学』第三十七号・平成十五年八月・筑波大学国語国文学会)
- (4) 元和七年から九年の間に成稿・出版されたとされる最も古い本。本稿では特に断らない場合、この本を指すものとする。引用は、『竹齋物語集(上)』(昭和五十三年・勉誠社)所収の静嘉堂文庫蔵本に漢字・句読点・濁点等を補ったもの。
- (5) 『西鶴織留』「命に掛の乞所」によって、医師のへしあはせの何たるかが一般的に知られている。
- (6) 鈴木棠三校注『醒睡笑』(昭和六十一年・岩波書店)より。後の別箇所の引用も同じ。
- (7) 寛永三年から十二年の間に成稿・出版されたとされている。引用は、『竹齋物語集(上)』(昭和五十三年・勉誠社)所収の赤本文庫蔵本に漢字・句読点・濁点等を補ったもの。
- (8) 詳しくは注(3)の拙稿を参照していただきたい。
- (9) 吉井始子編『食物本草本大成』第九卷(昭和五十五年・臨川書店)より。
- (10) 田中宏「整版本『竹齋』の研究(その三)」(『近世初期文芸』第十二号・平成七年・近世初期文芸研究会)